DOSHISHA
CLOSE UP

身近で最新の話題が学べる『同志社経済セミナー』

大学経済学部教授　佐竹光彦

2008年秋学期から始めています

２００８年は、経済学部の60周年でした。そして、数多くの催し物が開催されました。

特に、記念のシンポジウムや講演会が４回行われ、おおいにアカデミックな雰囲気につつまれた年でした。その灯を小さくしないように講演活動を通じて、経済学部のスタッフの研究成果を、経済学部生はじめ同志社の学生のみなさんや、さらに一般の方に情報発信しようという意図で企画されたのが、このセミナーです。

興味深い話題が満載

セミナーでは、経済学部の専任スタッフが、自分の研究分野に深く関係し、現在話題になっているテーマを取り上げ、基礎的な知識から説き起こし、テーマの本質を分かりやすく解説します。２００８年度秋学期から始まったのですが、その時は毎月第３木曜日の５講時に、そして、２００９年度は毎月第３金曜日の５講時に、大学今出川校地至誠館で開いています。

実際に今までのセミナーのテーマと内容をごく簡単にお知らせしましょう。（次頁）

２００８年９月のリーマン・ショック直後に第１回セミナーが開始され、まず鹿野嘉昭教授がサブプライム・ローン問題の本質を解説しました。そして、タイの政情が不安定になっていた時期に上田曜子教授がタイ経済と日本企業との関係を歴史から掘り起こし、現在までのタイの経済発展を説明し今後の見通しを示しました。菅一城准教授はイギリス経済史が専門で、イギリス経済の舵を大きく保守へ切り替え、その後ブレアーが修正したサッチャーの経済政策の意義を、イギリスの経済政策の歴史の中に位置づけました。そして、２００９年２月にオバマ米大統領の誕生直前に、篠原総一教授がその経済政策を、過去の政権の経済政策との明確な比較の中から予測しました。これらのセミナーの論旨は、『２００８年度同志社経済セミナー報告』として、パンフレットとしてまとめられています。

２００９年度春学期にはまず、労働経済の馬場浩也教授が人口減少から説き起こして、社会保障、経済成長、産業構造、格差問題についての21世紀の展望を示しました。そして、和田美憲准教授は最近のノーベル経済学賞受賞テーマであるメカニズムデザインという新しい制度設計の考え方に則って、郵政民営化への原理原則を示しました。小野塚佳光教授は金融危機が深刻であったアイスランドに調査旅行に行ったときの経験をもとにして、この金融立国の危うさを資本主義システムなどの視点から解説しました。

２００９年度秋学期の第１回目は、文化経済学の河島伸子教授で、インターネット上での創作活動（既存の著作物を取り込むことが多い）を発展させるために、著作権とどう向き合うかという議論を展開しました。そして財政の伊多波良雄教授は、その基礎を作った明治期からの地方財政と地方分権の流れを解説し、今後の地方分権の展開への見通しを示しました。この原稿の執筆段階では、和田喜彦准教授のセミナーはまだ開催されていませんが、核開発問題を環境経済学の視点から解説する予定です。

	講師	テーマ
2008年度秋学期		
第1回（10月16日）	鹿野　嘉昭	『米国のサブプライム問題』
第2回（11月20日）	上田　曜子	『タイの経済発展と日本企業』
第3回（12月18日）	菅　　一城	『失業とサッチャリズム』
第4回（ 1月15日）	篠原　総一	『米国新大統領の経済政策』
2009年度春学期		
第1回（ 5月15日）	馬場　浩也	『21世紀の日本を揺るがす構造変化』
第2回（ 6月19日）	和田　美憲	『民営化 vs メカニズムデザイン』
第3回（ 7月17日）	小野塚佳光	『氷の国で考えたこと：世界資本主義の行方』
2009年度秋学期		
第1回（10月16日）	河島　伸子	『デジタル文化とユーザーの創造性―著作権法への挑戦』
第2回（11月20日）	伊多波良雄	『明治時代からの地方財政を概観し、地方分権を考える』
第3回（12月18日）	和田　喜彦	『アメリカ核開発の負の遺産：環境への影響を中心に』

気軽に聴講、気軽に質問してください

私はこのセミナーを主催する経済学会の企画委員の一人として、すべてのセミナーを聴講しました。専門分野の話とはいえ、時々刻々と移り変わるそれぞれの話題を追い、その本質を基本的な事項から整理していくこと、またセミナーの対象が学生だけでなく、一般社会人の方々の参加もあり、どのように構成していくかという気遣いなどをそばで見ていて、講師の先生方がこのセミナーの話を準備するのは本当に大変なことであることを思い知りました。経済学部の専門科目には最近のトピックスに直接言及できるものもありますが、基礎科目のほとんどは基本的な話を辛抱強く身につけないといけないものです。また、専任スタッフの場合、基礎科目を担当することが多くなります。そのようなこともあり、学生の皆さんに先生たちの別の姿を見てもらう上でも、大切な試みであると思っています。そしてまた、『同志社時報』の読者の皆さんにも、経済学部専任教員の研究分野や最新のトピックについての見解を知っていただきたいと思います。

聴講者の数は、多いときで80人ぐらいでしたが、大体30～40人ぐらいです。

身近で、話題になっている経済問題を基礎から学びたいなら、わが同志社経済セミナーに、気軽にお越しください。情報に関しては、経済学部ホームページをご覧ください。

DOSHISHA
CLOSE UP

食の安全と心理学
――心理学部開設記念シンポジウムから――

大学心理学部教授　中谷内　一　也

昨年11月15日、心理学部は「安らかな食を楽しむために―安全への取り組みと心理学」と題する公開シンポジウムを実施しました。学内外の関係者のご協力と、そして何より、熱心に聴講してくださったたくさんの来場者のおかげで成功裏にシンポジウムを終えることができました。皆さまに深く感謝する次第です。本稿では、シンポジウムの内容を紹介し、われわれ心理学部の目指すところについてお伝えしたいと思います。

シンポジウムの内容

世界中を見わたしても、日本ほど安全で豊かな食生活を送っている国は少ないといってよいでしょう。しかし、一方では、食に対する国民の不安が昂じているといわれます。いったい食をめぐる状況はどうなっていて、安らかに食を楽しむに何が必要なのでしょうか。このような問題意識のもと、事業の現場、科学、報道、そして心理学の側面から議論を行いました。食の安全といった、一見、心理学とは縁の薄そうな話題についても、心の問題が深く関わることを示したいという狙いもありました。

最初に本学ＯＢであり、力強い応援団長ともいえる小嶋淳司氏（62年大学経済学部卒　がんこフードサービス株式会社会長）に事業者の立場からお話しをいただき、続いて、食の安全管理の最前線に立ってこられた関澤純氏（前・内閣府食品安全委員会リスクコミュニケーション専門調査会座長）に科学的なリスク評価と管理の実務について、さらに、松永和紀氏（サイエンスライター）からは食をめぐるマスメディア報道の問題点について興味深い話題を提供していただきました。最後に中谷内が、なぜ食の安全水準は向上しているのに、人々の不安が高まるのかを心理学のモデルを紹介しながら説明しました。それぞれ話題提供に力が入ってしまい、討論の時間を十分にとれなかったことを反省しています。しかし、２時間半の長丁場となってしまったにもかかわらず、ほとんどの聴衆が最後まで席を立たれることなく議論に参加してくださいました。手前味噌ではありますが、シンポジウムの充実ぶりを物語っているのではないかと思っています。

心理学部が目指す方向性

心理学という言葉から多くの人が連想するのはカウンセリングやこころのケアではないでしょうか。われわれの学部でもそれは大きな柱のひとつであり、今後、さらに強力な心理臨床家養成のためのプログラムを展開する予定です。ぜひ、ご期待ください。

しかし、心理学の中で社会との関わりの深い領域は臨床心理学だけではありません。今回取りあげた食をはじめとして、治安や医療、防災など、安全・安心をめぐるさまざまな問題や、資源の乏しい日本において最も重要な教育・人材育成の問題にも心理学は深く関与しています。同志社心理はそういった社会的な問題に積極的にかかわっていきたいと考えています。そのあらわれが、文部科学省より大学院教育改革支援プログラムに採択された「研究センター連携型オープンフィールド教育」プログラムであり、来年度から学部科目として実施される「心理学実験プロジェクト演習」です。いずれも、学生が教室から外に出て、心理学の適用可能性を追求する取り組みです。こういった姿勢の延長上に今回のシンポジウムのテーマも設けられました。われわれは社会が抱えるさまざまな問題に対して開かれた学部でありたいと考えています。

そのためには何が必要か

では、幅広く様々な問題にアプローチし、成果を残すには何が必要でしょうか。やや逆説的になりますが、私は関心が広いだけの〝何でも屋〟を目指すのではなく、心理学独自の基本スキルやものの見方に精通することが何よりも重要だと考えています。さまざまな立場の人が協働して問題に取り組むとき、院生や、場合によっては学部生でさえ、心理学を専攻する者としての専門性が期待されます。その期待に応えることによってはじめて同志社心理への評価を高め、さらに活動の場を広げることができるでしょう。心理学教育・研究の専門家集団としての足腰を強化すること、これが結局は、広く社会に開かれた心理学部となるために最も重要なことだと考えています。

DOSHISHA
CLOSE UP

同志社高等学校のカリキュラムの特性

高等学校教諭　加藤未知

２０１３年に完全実施となる高等学校の新学習指導要領が、昨年３月に公示されました。現行指導要領と同様、必履修の「総合的な学習の時間」の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する」と掲げられています。

このような形で指導要領に「総合的な学習の時間」が登場する以前より、同志社高校では「特論」と呼ばれる科目群を設置し、生徒の自主的な学び・調査・発表・討論能力などを育成し、必修科目等で獲得した幅広い知識をその中で使いこなして定着をはかることを目指してきました。さかのぼれば、１９５０年代のカリキュラムにおいて、すでに３年生の選択科目群が「特論」と位置づけられているように、独自のカリキュラム編成の中で、知識を活かし探究を深める科目をはやくから設置して、長く取り組みを続けてきています。

カリキュラムの編成と理念

本校では、互選による教員５人で構成される学習指導委員会が中心となり、各教科会や教員会議と往復してカリキュラム原案を作成、最終的に教員会議で確定しています。生徒にどのような学力を育むのか、どのように学力保障をするのか、という点を重視するのは無論のこと、大切にしている理念のひとつが、全人教育です。様々な個性が出会い、ともに生活をする場としてＨＲを尊重し、進路別のコース制はとっていません。教科教育を基本としながら、行事や課外活動も含めた総合的な教育活動を通じて、生徒の全人格的な発達を目指すという目的のもと、特に１・２年生において幅広い必修科目を設けています。それは、進路の別に関わりなく、すべての生徒に身につけさせたい基礎学力です。また同時に、個別の進路を切り拓くための学力を保障することも肝要ですから、多様な進路の選択が許され、それにふさわしいだけの学力を身につけるために、２・３年生にバラエティ豊かな選択科目群を設けています。それも、進路別に組み合わせたパック式の選択科目を学校側で用意するのではなく、生徒それぞれが自分の関心・進路に応じて、選択科目を選びとり、組み合わせているのです。

カリキュラムの変遷

また、１９７４年度から実施されたカリキュラムでは全科目履修が基本であり、理科や社会の全ての分野をはじめ、数学は全生徒が数学Ⅲまで、芸術も音楽・美術をともに履修となっていました。３年生のみ自由選択科目があり、生徒各自が自由に組み合わせて10単位分の科目を学びます。選択科目に「キリスト教学特論」や「古典特論」「地理特論」「数学特論」等とありますが、多くの教科で課題発見・解決、理解や探究を深める内容に取り組んできました。その後、細かい改編を行いつつも、このカリキュラムがベースとなって進んでいきます。１９９４年度から実施されたカリキュラムでも、全科目履修の基本は変わらず、さらに多様な進路に対応するために、２年生にも選択科目を新設し、３年生の自由選択も12単位に増やしました。

そして、２００１年度より５日制を導入したことを受け、現行のカリキュラムとなりました。５日制の中での学力向上・進路保障の観点から、３年生には数学・英語において必修選択を導入しました。数学では文系の生徒でも数学Ｂまで修めることになります。さらに、「総合的な学習の時間」設置の際には、従来、「現代文特論」「数学特論」「理科特論」など、特論として取り組んできた科目を発展させ、「現代文研究」や「数学研究」「理科研究」を置きました。新指導要領に則ったカリキュラムの編成においても、これまでの蓄積を生かしながら、生徒ひとりひとりの関心や進路に応じて、豊かな力を育み伸ばしていけるよう、工夫を重ねていきたいと考えています。

1974年度実施　カリキュラム

必修科目

科目名		1年	2年	3年	単位数
キリスト教学		2		1	3
国語	現代国語	3	2	2	7
	古典	2	2	3	7
社会	地理	3			3
	世界史		4		4
	日本史			3	3
	倫理社会		2		2
	政治経済			2	2
数学	数学Ⅰ	5			5
	数学Ⅱ		5		5
	数学Ⅲ			4	4
理科	物理Ⅰ		4		4
	化学Ⅰ	4			4
	生物Ⅰ		3		3
	地学Ⅰ	3			3
保健体育	保健	1	1		2
	体育	3	3	3	9
芸術	音楽Ⅰ	2×2	2		4
	美術Ⅰ				
英語	英語講読	2	2	3	7
	英作文	2	2	2	6
	英語演習	1	1		2
ホームルーム		1	1	1	3
合計		34	34	24	92
一週間の時間数		34	34	34	
選択可能最大時間数		0	0	10	
最低選択時間数				6	

選択科目

科目名		単位数
キリスト教学特論		2
国語	現代国語特論	2
	古典特論	2
	総合国語	2
社会	地理特論Ａ	2
	地理特論Ｂ	2
	世界史特論	2
	総合世界史	2
	日本史特論	2
	総合日本史	2
	現代思想特論	2
数学	数学特論	2
	数学演習ａ	2
	数学演習ｂ	3
理科	理科特論	2
	物理Ⅱ	3
	化学Ⅱ	3
	生物Ⅱ	3
	地学Ⅱ	3
保健体育	体育理論	1
	総合体育	2
芸術	音楽Ⅱ	2
	美術Ⅱ	2
英語	英語ａ	2
	英語ｂ	2
	英語ｃ	2
	英語ｄ	2
第二外国語	ドイツ語	3
	フランス語	3
	中国語	3
家庭		2

※現行カリキュラムについては、
同志社高等学校HPをご参照ください。
http://www.high.doshisha.ac.jp/

DOSHISHA
CLOSE UP

海外語学研修・ホームステイプログラムについて

女子中学校・高等学校教諭　谷口　美都子

夏期国際交流プログラム

本校では、夏休みに「高校生対象のイギリス研修」と「中学生対象のオーストラリア研修」を行っています。両者の第一の目的は、英語圏の語学教育機関で集中的なレッスンを受け、英語の運用能力を高めることです。第二の目的は、一般家庭にホームステイをし、さまざまな生活体験を通して、文化の違いや共通点を感じとることです。また、観光なども取り入れ、その国の地理や歴史に対する理解も深めてほしいと思っています。

両プログラムでは、現地での研修だけでなく、オリエンテーションや事前・事後の学習にも力を入れています。1月の生徒・保護者対象の説明会から始まり、選考会議を経て、春休みに諸手続きを行います。4月下旬のオリエンテーション後、5月、6月にはグループレッスンや業者テストを行います。研修後は、学園祭での展示作品をつくることと、体験記の執筆を課題としています。また、礼拝で、生徒数人による報告も行っています。

イギリス研修

募集人数は高校2・3年生の約30人で、期間は15日間です。高い教育水準を誇るベルスクール・ケンブリッジ校で研修をし、一般家庭にホームステイをします。

授業は1クラス10人程度の少人数制で、90分授業が午前2コマと午後1コマです。また授業後には、自由参加の課外プログラムを行っています。ケンブリッジ大学のカレッジのチャペルや博物館に行ったり、学校内でスポーツをしたりスコーンをつくったりします。週末はエクスカーションで、土曜はロンドンへ、日曜は近くの町へ遠足に行きます。

オーストラリア研修

2006年度から企画をし、2008年に第1回の研修を実施しました。募集人数は中学2・3年生の約25人で、期間は11日間です。アデレードにあるキリスト教主義の女子校、アネスリー・カレッジで研修をし、在校生・卒業生家庭にホームステイをします。教育の特徴や雰囲気は、同志社と共通する点も多い学校です。

午前中は、本校生のみで、英語集中レッスンを受けます。午後からは、バディ生徒（お世話係）のクラスで通常授業に参加したり、半日遠足に行きます。週末は、ホストファミリーと過ごします。オーストラリアのホームステイは、一般的にホスピタリティーが高く、中学生にはふさわしいと感じています。

総括と課題

企画・実施にあたって苦労してきたことは、イギリス研修では、ホームステイ家庭の質や条件の問題です。こちらの希望通りにはいかず、何とか折合いをつけて、保護者の理解や了解を得てきました。オーストラリア研修では、中学生に特徴的な事として、ホームシックや注意力散漫な様子も見られ、今後何らかの対策が必要と感じています。

多くの生徒にとって、この研修が初めての海外体験です。最初は緊張したり、コミュニケーションがうまくとれなかったりと、苦労をしています。しかし、日を追うごとに、英語にも慣れ、自分から積極的に話しかけて、研修地での学習や生活を楽しんでいます。生徒達のそのような姿を見たり、つづられた体験談を読んで、生徒の成長を感じられることが、私たちにとって何よりの喜びです。

今後も、これまでの経験をいかして、より充実したプログラムをつくっていきたいと思っています。

オーストラリア研修①

オーストラリア研修②

イギリス研修

DOSHISHA
CLOSE UP

創立60周年を迎えるにあたっての改革

香里中学校・高等学校教諭　市野和康

同志社香里中学校・高等学校は２０１１年に創立60周年を迎えます。それを機に学校改革を進めています。２０００年度より実施していました週５日制を２０１０年度より週６日制に戻します。週32時間授業とし、木曜日は５時間授業、土曜日は３時間授業とします。６日制に戻すのは、新しいカリキュラムのもとゆとりをもって学習できることを目指しています。現在の５日制では、クラブに入っている生徒は、土・日とも活動している生徒も多く、家庭学習の時間がさかれているのが現状です。５時間授業の木曜日は下校時間も他の曜日より１時間早くして、家庭学習の時間を少しでも多く確保したいと考えています。

６日制を実施すると、３年間で６時間増になります。中学校のカリキュラムは、社会２時間、数学１時間、理科２時間、体育１時間の増になります。総合的な学習についても、現行から２学年は変更し、中学１年生は国際理解で英語科が担当、中学２年生は表現指導で国語科が担当に変わります。中学３年生は従来からのキャリア教育を行いますが、担当は社会科になります。２０１０年度生からの中学校のカリキュラムは表のとおりです。

次に、高校のカリキュラムは、２０１３年度より指導要領が変わりますので、２０１０年度生から２０１２年度生までは暫定的なものを考えています。「国語総合」１時間、「世界史」１時間、「数学Ⅱ」１時間、「生物Ⅰ」１時間、「リーディング」１時間の増になります。５日制のままのときは、「情報C」の関係で週１回７時間目を実施しなければなりませんでした。２０１３年度生については、これから検討していき、現行をより深めたいと考えています。

現在土曜日に実施しています他大学受験者向けのアドバンス講座は土曜日の午後に移す予定で、他の土曜講座についてはどのような形で残していけるかを検討しています。

補講は、現行では学年によって毎日補講の生徒もおりますので、現行を少し変えて、中学は数学と英語を、高校１・２年生は国語、数学、英語を、高校３年生は３教科に加え進路の関係で社会、物理も実施し、さらに身につくものとしたいと考えています。

次に、新校舎建設を行います。昭和30年代に建設された理科の講義室・実験室や芸術関係の教室がある明誠館と高校ＨＲ教室がある尚志館を建て替えます。まずは、２０１０年度に着工で理科および芸術関係の特別教室棟を現在の高校生が使用している下足箱のある周辺に３階建ての校舎を新築します。なお、保健室は清心館の中学１年の教員室に移動させます。中学１年から３年の１・２組を現在３組から６組がある友愛館の社会科教室、多目的教室、情報教室に移し、全クラスが友愛館になります。情報教室は興文館の視聴覚教室に移動させます。その後、２０１１年になりますが、明誠館、新明誠館を取り壊して、その跡地に高校ＨＲ教室中心の普通教室棟を新築します。新校舎の普通教室棟には、社会科教室や多目的教室などを入れます。この建設は、現在、学年用の教員室が４箇所に分散していますが、中学校と高校の教員室の二つに統合することも目的の一つになっています。

新校舎の完成イメージは
http://www.kori.doshisha.ac.jp/newbuilding/index.html
でご覧いただけます。

香里中学校教育課程表（2010年度生）

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語	聖書	計	特別活動	総合的な学習	合計
1	4	4	4	4	2	2	3	2	4	1	30	1	2	33
2	4	4	5	4	1	1	3	2	5	1	30	1	2	33
3	4	4	5	4	1	1	4	1	5	1	30	1	2	33

DOSHISHA
CLOSE UP

英語の授業で平和を考える
～アレン・ネルソンさんの冊子を中心に～

同志社中学校教諭　山口良子

２００５年度、１年生が真摯な気持ちで学ぼうとする姿に触発され、３年間の見通しをもって英語の授業で「人権・平和につながる教材、生きていくことの意味を考えられる教材」を読み、感じ、考えることを生徒とともにしてみようと思いました。同志社中学校ではアレン・ネルソンさんの冊子*を教材にしての英文読み取りを１９９９年以来毎年続けてきました。この学年が３年生になったときにアレン冊子を深く読み取れるように、学校行事とも関連させて１年生時から準備しました。

*アレン・ネルソン：米海兵隊員としてヴェトナム戦争に従軍、その中で「人間誕生の瞬間」に立ち会い、生命の大切さに目を開かれる。帰国後18年間におよぶＰＴＳＤを克服し、日米各地で戦争の愚かさと日本国憲法第９条の大切さを訴え続けた。“To End the Misery of War Forever ～No Reconciliation, No Peace～”（戦争の悲惨を終えるために―和解がなければ平和はない―）（かもがわ出版）はその講演記録をまとめた冊子。この編集に同志社中学校の教員も関わった。

授業の進め方―基礎トレーニングと協同学習を大切に―

音読の大切さを１年生の時からたえず教え、英語を読むことが楽しくなるように英詩、寸劇、各レッスンの暗唱、英文５回筆写など、基礎トレーニングを重視しました。英語劇・会話の発表では、お互いの気持ちを感じあう「気」のあわせ方の練習を大切にし、スピーチ発表の時に聞く側の生徒は「ひと言コメント」を書いてわたすなど、個々人の基礎トレーニングとともに「学びあい」を実感できるように工夫しました。

生きていくことの意味を考え、深められる教材（２、３年生で）

・My Dream・“Landmines and Children”（地雷と子どもたち）・“Sadako and the Thousand Paper Cranes”（サダコと千羽鶴）・“I Have a Dream”（私には夢がある）・“To End the Misery of War Forever～No Reconciliation, No Peace～”・『Hana's Suitcase―ハンナのかばん―』・英文日本国憲法など。

教材を深めるために背景を学び考える試みもしました。

アレンさんの冊子をどのように読んだか

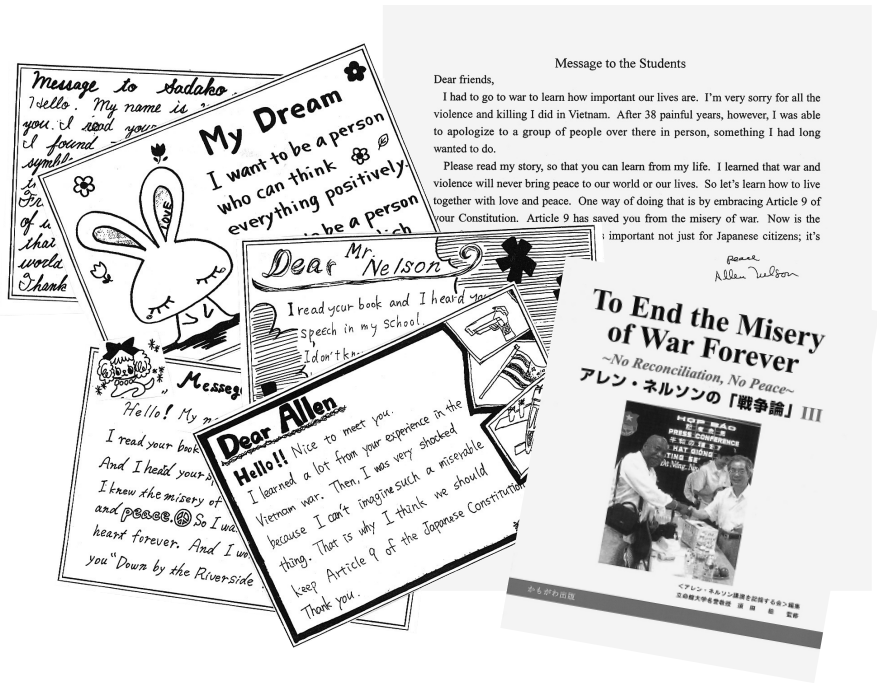
２００７年11月人権行事の日に、アレン・ネルソンさんのお話をチャペルでじかに聴いたあと“To End the Misery of War Forever～No Reconciliation, No Peace～”を読み始めました。

①最初のMessage to the Studentsは読みとりのあと暗唱。
②アメリカ海兵隊の訓練、沖縄の様子がわかるＤＶＤを観る。
③本文６章～12章まで、ワークシートで予習し読み進める。
④ワークシートは毎回集め、生徒の感想の部分はクラスごとにすべて打ち出して授業で配り、お互いに感じたことを交流。

この冊子を読み始めてから、それまで英語が苦手だった生徒が、英文読み取りの内容によくついてこられるようになっていました。彼は、「１年生のときに学園祭でアレンさんの（日本語の）朗読劇をしたので、とても興味を持っていた。だから英文をよく読んだら内容がわかりやすかった。」と言い、友だちにも一生懸命に教え、自分の感想が掲載されたプリントも大切にファイルしていました。

卒業直前には、「３年生の終わりにあたって、ひとこと英文でメッセージを書こう！」と呼びかけ、学年文集に纏めました。

「人と人を結ぶことば。そのことばを使ってお互いがわかりあうことを喜びと感じることこそ平和の基礎ではないでしょうか。「非暴力」で意思を伝え合い「平和の文化」を創っていくことが大切だと感じています。『平和』は国連からやってくるのではなく、あなた方一人ひとりから始まるのです」とアレンさんは言っていました。アレンさんに出会った生徒たちはそのことを感じてくれたようです。



DOSHISHA
CLOSE UP

大学で目を輝かせて学ぶ学生を育成したい！
―同志社と近江兄弟社高校の高大連携について―

近江兄弟社高校　校長　藤澤俊樹

同志社大学デー

２００９年10月10日、本校にて第３回「同志社大学デー」が開催され、百数十人の本校生徒・保護者・教職員が参加しました。パワーポイントを使って片山傳生副学長（企画部長）が説明される同志社大学の歴史や新島襄先生のスピリットに、多くの本校生徒は、本校の「自校教育」で学習した、近江兄弟社学園の歴史や本学創立者W.M.ヴォーリズ（同志社カレッジソング作詞者、アーモスト館等設計者）と一柳満喜子のスピリットを重ね合わせ、敬意と親近感を持って聞き入りました。その後、入試説明や同志社大学在学中の本校卒業生のメッセージ、公開講座と進み、大学での学びを身近に感じ、進学への意欲を高める貴重な機会となりました。

同志社との教育連携協定

２００７年５月、近江兄弟社高校は他の４校とともに同志社大学と教育連携協定を締結し、以来、様々な取り組みを展開しています。併せて同志社女子大学には１９７０年代から「協定校」として大きなご支援をいただいています。

毎年「同志社大学デー」「同志社女子大学デー」を開催しているほか、同志社大学からは「学生チューター」という学生アルバイトを派遣してもらい、本校自習室の指導をしてもらっています。また同志社女子大学へは推薦入試推薦内定者を引率し、京田辺キャンパスを訪れ、事前見学をし、本校卒業生との情報交換等を行っています。

本校が高大連携事業に期待すること

さて急激な少子化の進行などで、高大の接続のあり方が大きな曲がり角にさしかかっています。「選抜」だけでつながる関係の見直しが迫られているのです。高校は「大学に合格させれば良い」、大学は「学生を確保できれば良い」ということではなく、ともに力を合わせて有効な接続事業に取り組むことが求められています。

教育連携協定調印の直後の本校公開講座で森田雅憲大学商学部教授（前企画部長）は、「最近、資格を取得するために学ぶ学生が増えているが、本物の学びとは言えないのではないか」と問題意識を述べられ、「他の人のため」という視点を持った「本物の学び」が重要と強調されました。以後、私たちは「本物の学び」を合い言葉に、高い志と学問への強い意欲を育てようと「連携教育」に積極的に取り組んでいます。２０１０年にはその「連携教育」のステージになる新校舎「連携教育校舎」が完成します。「調べ学習」の機能を充実させた図書館、大学教員による実習・実験にも使用できる「日本文化教室」「生活科学教室」「語学学習室」「環境化学実験室」「エネルギー科学実験室」などを備えたものとなります。２０１０年度以降は新たなステージでの「連携教育」にチャレンジしたいと決意を新たにしています。

教育理念の共通性を軸に

２００９年秋、同志社大学の推薦入試に合格した、ある生徒は次のように語ってくれました。「私が近江兄弟社高校に入り学んだことは数え切れないほどたくさんありますが、その中でも何よりもキリスト教の精神が大きなものを与えてくれたように思います。…学園訓『地の塩・世の光』や『隣人愛』は私の人生の目標を与えてくれ、好きな聖句の『求めなさい。そうすれば与えられる』は私を大きく成長させてくれた言葉です。これから高校を卒業し、大学へと進みますが、キリスト教の精神のもとで、また学べるということに、とてもワクワクしており…」

私たちの「大学で目を輝かせて学ぶ学生を育成する」取り組みは、まだ始まったばかりですが、確かな手応えを感じています。

「実施された公開講座一覧」

【2007年9月　同志社大学デー】
○社会学部メディア学科　渡辺武達教授
「現代のメディア環境
―『発掘！あるある大辞典』問題を例に」
○工学部機能分子学科　加藤将樹准教授
「セラミックの磁性と超伝導」
【2008年7月　同志社女子大学デー】
○企画部長　生活科学部人間生活学科　諸井克英教授
「親指コミュニケーションの『きずな』
―電子空間の拡大と自己世界へのひきこもり―」
【2008年10月　同志社大学デー】
○副学長　企画部長　生命医科学部　片山傳生教授
「キリスト教教育連携協定の期待する理念と学ぶ姿勢、大学での学びについて」
○文学部心理学科　青山謙二郎教授
「大学で学ぶ心理学とは何か」
○スポーツ健康科学部　石倉忠夫准教授
「明日のために！　スポーツの目標設定法」
【2009年7月　同志社女子大学デー】
○生活科学部部長　村瀬孝教授
「ジブリアニメの広がり―となりのトトロの世界観」
【2009年10月　同志社大学デー】
○文学部英文学科　金谷益道准教授
「大学で学ぶ英文学批評」
○理工学部環境システム学科　伊藤靖彦教授
「環境とエネルギー　―今まで、そしてこれから―」